



鹿博だより

No.102



長目の浜（薩摩川内市里町）

長目の浜は、上甕島北部の長さ4km、幅40～100mの砂州（さす）が発達してできた浜で風光明媚な場所として知られています。この砂州によって外海と切り離されて形成された海鼠池（なまこいけ）、貝池、鉾崎池（くわぎきいけ）の3つの湖（潟湖）はそれぞれ塩分濃度が異なり周辺の生物相にも変化が見られるため学術的に価値の高い場所です。また、砂洲上に発達した植物群落は全国的にも少なく貴重です。そのことから平成27年「甕島長目の浜及び潟湖群の植物群落」として国指定天然記念物に登録されました。

「博物館の新たなミッション」

館長 鈴木 敏之

昨年12月に、博物館の利用者500万人が達成されるといううれしいニュースがありました。1981（昭和56）年に旧県立図書館が新博物館に整備され、当館が南北600kmの豊かな鹿児島島の自然を紹介する博物館として活動を始めてから、39年間にわたって来館、利用された皆様に成し得た記録、快挙であり、また、これまで当館に御支援、御協力をいただいたすべての皆様に、感謝申し上げます。職員一同、この節目をまた新たなスタートとして、積み重ねた成果や課題を確認しながら、地域の親しみやすい博物館となるように今後も日々、研究、精進してまいりたいと考えております。

さて、新型コロナウイルス感染症拡大は人類のこれまでの感染症への概念や生活のスタイルを変え、私たちの生活に今なお不安や影響を及ぼしている状況にあります。当館でも昨年4月の緊急事態宣言により施設の全面休館や再開後のイベントの中止、規模や内容の一部縮小など、コロナ禍にあって様々な感染症拡大予防の対策を可能な限り施しながら対応してまいりました。

博物館では、人の持つ五感等を通じて本物（実物）の

標本に直接、触れてもらう機会を提供することにより、来館者や利用者共感や感動を与え、さらに新たな発見をしたり、感性を磨いたりしていただけると確信しておりますが、このコロナ禍のためそれらに制限や制約があることに私たち職員も不自由さやジレンマを感じているところでもあります。ただ、このような状況だからこそ、博物館の活動や情報発信等のあり方、役割にもそのニーズが変化してきており、より一層工夫が必要であることを実感した次第です。今年度は、それらを念頭におきながら、例えば、企画展の取組として、事前に募集、投稿していただいた写真を活用して、一般の方が参加できる機会や場面を取り入れてみたり、企画展の見どころや職員が一押しの展示などの情報を公式SNSでこまめに発信したりして、新たな工夫を試行錯誤しているところです。

博物館等での活動は、災害時やコロナ禍などのパンデミック時において「不急」であっても「不要」ではなく、企画等の工夫をとおして、知りたい、確かめたいという探求心を満たす「心」の健康や新たな「人」のつながりに博物館が一役買う存在でありたいと考えています。

資料収集事業

博物館の業務に「資料収集・保管事業」があります。資料には、実物である一次資料の他に、写真や映像などの二次資料があります。今年度、桜島で発見された噴石の落下痕をドローンで撮影しました。この落下痕は、昨年6月に桜島の南岳で発生した爆発的噴火に伴う噴石によってできたものです。当館でも、落下痕や落下地域の調査を行いました。落下痕は直径約6m、深さ約2m



落下地点（○印） ドローンによる撮影

の窪地になっており、周辺の木々がなぎ倒され、噴石の破片が散乱していることを確認しました。ドローンで上空から撮影した映像を見ると、噴石が人家の近くまで届いていることがよくわかります。

今回の資料を編集した映像は、本館3階展示室の大型モニターや動画共有サービス YouTube の当館チャンネルでご観覧いただけます。



噴石の落下痕

令和2年度に開催した企画展

県立博物館では、収蔵資料や調査研究の成果や児童生徒の研究記録等を活用してさまざまな企画展示を行っています。

令和2年度は、企画展「ひょっこりエイリアン」（3月21日～6月7日）、「かごしまタイムトラベル～化石展～」(7月18日～9月6日)、「山の達人」(10月3日～11月29日)、「変な標本」(12月19日～5月5日)を開催しました。



企画展「かごしまタイムトラベル～化石展～」

また、夏休みの児童生徒の研究を応援する企画展である「チャレンジ理科研究」（6月30日～8月30日）実施し、自由研究のヒントを提供しました。

次年度も魅力ある展示会の企画や開催を通じて、県内外の方々に鹿児島島の自然や身近な科学に楽しく触れられる機会づくりを行っています。



企画展「山の達人」

<学ぼう郷土の自然 移動博物館事業>

県立博物館では、郷土の自然を見つめ、科学する心や自然と共生する心を培うために、「移動博物館事業」を行っています。

令和2年度は7月9日に鹿児島聾学校、11月26日～29日に喜界町で開催しました。

【鹿児島聾学校】

体育館を会場に、剥製や標本など、約3,000点を展示しました。

今回は、聾学校の児童、生徒が対象だったので、口元の見えるマウスガードを着用したり、実験時に字幕を準備したりするなどの工夫をして実施しました。鹿児島聾学校の先生方の協力もあり、非常に喜んでいただくことができました。



「楽しい実験」会場

また、生きものとのふれあいコーナーでは、生きているヘビや、世界最大とも言われるマダガスカルオオゴキブリに触ってもらいました。最初は恐る恐るでしたが、慣れてくると生きものの特徴などを観察しながら積極的に触っていました。



生きものとのふれあいコーナー

【喜界町】

新型コロナウイルス感染症対策を入念に行いながら、喜界町役場を会場に、シカやイノシシなど身近な動物や世界の昆虫など5,000点を超える標本や剥製を展示したり、喜界町の自然をパネルや標本等で紹介したりしました。



開場式

町内の全小中学校から児童生徒の観覧があったり休日を利用した家族連れの来場があったりして、期間中、延べ3,503人もの利用者で賑わいました。会場ではご覧になった方からの質問に職員がお答えしたり、液体窒素を用いて凍ったバラの花びらが、ぱりぱりと砕ける様子に子供たちの歓声が上がったりしました。また、土、日曜日は、喜界高校の生徒の皆さんに工作体験コーナー等でボランティア活動をしていただき、職員、町民相互の交流や情報交換の時間も設けることができました。

「海岸の植物の様子がイラストでよく分かった。」とか「来年も開催してください。」など、ありがたい声もいただきました。今後も地域の自然に目を向けて、その豊かさに気づいていただける事業を推進していきたいです。



高校生ボランティアによる解説

展示紹介

企画展
「変な標本」 タガメの言い分

企画展会場で古いタガメの標本を展示しました。

標本ラベルには、鹿児島市上荒田 1927 年とあります。鹿児島大空襲の戦火を潜り抜けた最も古い昆虫コレクションに含まれていました。県立博物館は、その後も収集、保管活動を続けており、このような昆虫標本が6万点以上収蔵されています。これだけ多数の昆虫をなぜ収集するのでしょうか。



タガメは、農薬に非常に弱い昆虫です。また水生昆虫や魚類だけでなく、ヘビやカエルなどの爬虫類、ネズミなど小型の哺乳類、鳥類なども捕えます。標本という“実物”とタガメの生態を重ねると、当時の環境が推測できます。94年前、上荒田町周辺は、タガメの命を支えるだけの多様な生物が、高密度に生息していたはずですが。翻せば、現在、そのような環境がないから、タガメは絶滅危惧種になってしまった…。

この例から、標本は過去の昆虫相の変遷を私たちに教え、人類存続のためにも欠かせない、生物多様性保全に関する基礎的な情報をもたらすことが分かります。小さいながらも、圧倒的な情報量を保持している標本の数々。今後も、多くの昆虫標本が見せる“実物”の迫力を存分に紹介していきたいです。



展示中の古い標本箱

学芸室の窓から

今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、5月末までプラネタリウム投影が休止となり、プラネタリウム春編番組を一度も投影できませんでした。そこで、投影できなかった星物語「からすの羽根はなぜ黒い？」を始め、これまでの投影番組で使われた物語動画を動画共有サービス YouTube の当館チャンネルにおいて公開し、自宅でも視聴できるようにしました。

- ・ オリオンを救え！
- ・ からすの羽根はなぜ黒い？
- ・ さそり座とかぶとむし座
- ・ 輝く西郷星
- ・ おとめ座と4粒のざくろ
- ・ くさりにつながれた姫
- ・ ハトになった七人姉妹
- ・ クマになったおやこ
- ・ 星座になったガニユメデス
- ・ 怪獣テュフォン襲撃
- ・ 名医アスクレピオス
- ・ エリダヌス座物語
- ・ オルフェウスの竖琴

公開中の動画(2021年2月現在)

また、字幕機能にも対応し、字幕を表示させるようにすると、下図のようにナレーションが日本語で表示されます。ぜひ、お試しください。



●鹿博だより 編集・発行 鹿児島県立博物館
〒892-0853 鹿児島市城山町1番1号
TEL 099-223-6050 FAX 099-223-6080
<https://www.pref.kagoshima.jp/hakubutsukan/>
Facebook: <https://www.facebook.com/kagohaku/>
Twitter: <https://twitter.com/kagohaku>

